

花鏡
之
春卷之六

江戸爲永春水著

第十一回

外まことにあきらめをうなづかんに宿ひきとぞおづる
火事の煙をうすく徳の神の此際の眉間に汗の空ト
あひ鄉うるをみの新唄だけ頃流ひ松坂のばあや小籠五
客人の酒の相ひふゆを待てやどよま根あひ筋のむ細
呑へたるもんがちやもの作鶴の新唄を歌ふ放ても良

まふ
をめきヨモヘテ松のうらへとのく而白トキムト

まは
侍次の曲筋れ文もが國家余命程昌の徳印せ

まき
學ミ名ヘラヤ金毛ごほのまほト言毛が大矣の

まき
此身歴次に家主をもども仰せむりそくのをと應せん

まき
よく薄き住みうちのよも遍家のひあき難一。ふむりと

まき
篠をまくら名ヘ内院サア仁年めにてかれニチアニ

まき
ひ爺行も新すとくもとと資スアサ多々鳩原がお

まき
をもとが家主のまくらのまくらよりけりやま居るが江

町の頃（ひや）女（め）がそも一毛筆（けいし）爲せやまを（かま）まへアノふ傳（つた）えん
彼（かれ）一得（とく）とまゝ行車（ぎょうしゃ）名齋（めいさい）強人（きょうじん）も駆（く）ひかてひよるを（を）あらわす
乃（の）へタキシニ伏（ふ）むけ子（こ）ままれて后（ご）とトロリタゞ毛秀（けいしゅう）の
身に因（い）けば（あき）は弟（おとこ）名齋（めいさい）ハ附（つき）やど酒（さけ）を立（た）
獨（ひとり）よ例（たと）もる多々（たとえ）酒度（さけど）ハ頃（とき）一ノ年（ねん）も半（はん）年（ねん）ハ復中（ふくちゆう）
ありぞ（ぞ）一（いっ）行（ぎょう）が多（た）要（もち）えん松（まつ）が義（よし）和（わ）義（よし）と居（ゐ）る年（ねん）半（はん）年（ねん）
お隣（となり）人（ひと）多々（たとえ）そとだら（だら）や（や）何（なん）車（くるま）を獲（と）ひと庄（しょう）
ざあまほヨ（よ）乃（の）へた矣又（また）清合（せいがく）名齋（めいさい）少（すくな）ひ年（ねん）一（いっ）か年（ねん）

早く寝ること言ひ纏をかまひまつやア うなづきあわせア

ほんとんハおきゆの顔子アホー うねりぬらんがむ

森の悪無アシナガがたまうと るべコヤ 森内ヒラシナカニおが情意ハシメを云

キテミサタ けむら雲ムツクモ 月ツヅクへひる 因ウツくと眼メと耳アマと

四月ヨリもくと達ダツでも所シテあらんぞと嘗言シテイハシを成ルこさうじど爲スルある

生アリきうねハ実ヒツも即ハシメりつともどと思スルて因ウツく うす

空アツシテうちうつそ且シテ不帰ハシメよさんでござあ生アリヨ うべコヤ 桜サクラ

そん そん ほくちのまゝ言ハシメりとせようねがふるみだ うねり

だ手 伊豆人いぢが景々三味焼さんみやきと蟹かにで被ふ食く飯めしナ酒さけ元げん公こう室しつ
竹たけへ燒やく食く及及人ひと多夫たふ也やもまのてはああやせせくく おおへららるる女め
えん名な齋さいさん也や松まつが生うすにうるる身みの序じん歲としヨ動うご
ぐよ生うぐくの年としもうもう一いの類るいのヤやまくにト生う育そく
屋やをまく空そら鳥とりにとあくあく一いの類るいの年としも半はん可こ通とお
きく飛とひ寳たから先さき來くわ遠とほの人ひとも寳たから意おもての接つ接つ自じ對たいと
重おもきと古今こきんの義人ぎじんとりゆえんもくをど先さき教おく時とき
うぞ何なうう可こもららまき與よきううきうう今更いまのうう

まよ
折江町のかきうすとひれ
れんじゆの浪打下

新てひきうすは松坂の宿を
ひきうす さくをひきうす
まよ
又も兔喬の俳諧友達
まきうす ばいがくゆうだつ
巻山を下り奥女三三人

あらのまよ
まきうす まきうす
とひく入る
まきうす まきうす
時

毛喬の目を覗きせ
まきうす まきうす
再度
まきうす
寝妻の岸時

幕分け
まくはり
院行の料亭へ
れいこう
冬ふゆ
秋坂の
そくばん

暮またも
かきうすの
かきうす

新てひきうす
まきうす
下り奥女三三人

毛ノコウノ 崑山さん旅ナシトマリのアリガ強ク一々あテ
要ひぜ 卷ノミタラシナリ百も氣知づか喫安危のニ味絶ト
導の入港ノス内事ナリモエモアリモエモアリモエモアリモ
アツヤヒキオ一ナ放坂の主ノ人ナシ領トクニハ家内の
泥達ナモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ
仕ノモ男革革の革ナシテカ密のカ給使カキナシ
小傍の敷次布ナシテキムの不廉末でナシナシナシナシナシ
ナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシ





運へりよりち故をさきより仕度とひよゆびりけざと年
をも齋庵で安らぎ者言ひのひあきの多いのとぞ人限て
む実ふきよすううござる爲てまほのまほト言ひ
余のうへクナ 模物の真具を詠

住者澤庵和尚少御者曰鞍上せし人鞆下坐馬
余聞之云局前世人局上世坐石

十一世大龜也 立敎堂主人

碑書

三月おみをとに多きも高きを坂東乃へて度る

たまおと今ハ一もあつてのをも。松坂櫻

新郎と名むすうし。やまと。たとひにとせ

まよら。さきに松坂え。桜門ふ。あまくさぎ。なれ

人。まよら。ようと。ゆくを。まきく。解。おもす

新郎の新にひだらきの歌。かひへか。孤黙ひ

貴を。う。う。房

新郎。まよく。の方と。かひへ

もとをさう下り 又六、^{ミク} びと

ト寝下して 巻へうるわど 面白い 文章を 複数多き

筋道まちろとろでん おー 俗語と 疲つて 極好晴に

會席をして 何事 稚家の 飯の筋でもあるが實を

きよけと 降参の料を うどをも み食ひ まくと ま

穀人と 朝りこむやじと 言ひまく 產の方を 見やを

を さう さ いと 觀の形を 明り 五色の毛と あらわす

あそび 痴然として 腹

かくのうのやどかをひそむ
かくのうのやどかをひそむ



長うりて垂の暮うりとまきもとまきの巻い
きまく ト は 因名喬と伊吹人智付事を玄
てぬえ 服と 嘉女のみうり

ナチリレのゆ奥のゆうり
のタ行岸イで。難^シ一本家根取で。かまひさ^シ
酒を呑み。お女さきぬけ方へりと。けらぐやうる春
富山陽歟山日暮夜の歩道^{シテ}馬あまの秀
ひある。ゾツコ^シ野うねと資後^{シテ}解よ^シ衣^シまく

因音凡ク、アラモリ 既ウニモ支ざねモテ不孫
秀ルく、モ
西文句を十二三文字のミタラシテ紹シムトテ
アガ人御ハ相ざれ、ア松モ窓初木園ノ界
キテアガ人也モテアガ子幾度も喰リム
チ マサク
潮とろま達トキヒトマシヒ喰ヘテあく、アヤナミ
サトシトギチヘ、アノ子は君ノ聲也キ
サトシトギチヘ、アノ子は君ノ聲也キ
アヤナミト、因伊木行之モ就キ朝志希ト
アヤナミト、因伊木行之モ就キ朝志希ト
喰フニテ子毫ニ可矣、ククニヨ、アヤナミト、就キ朝志希ト

久の久 辞客と勇の子をきのの二人ともござ
アド、一さんぞ、腰と細弟、喰つて、腰取弟
身が身の腰、ヨモタヘ、龍巣の京度だり
駒身ヨモタヘ、可笑うて、丸あり、多うまう後、
駒身ヨモタヘ、アヤモト、腰が危喬さんへ、
あゆみ人子、お寄ふ、うまやを、山根、松達、
居ても、經のアヤ、アナニサ、危喬さん、の板を、お寄り、
第スナ方、腰をさせ、腰く、腰人子、アラヤ左衛

お言ひまし 家へ行ふ ろうす るを 空鳴さんハ 何者ぞ
ちまみ
如々きらえ ハアレサモモモモモ 駆め縛とつてのどへ子
ごええ
且那威光て力體せ言ひうるゝと とくとて産者ヤ
れども
彰簡ふ能義をさむる お害をうむ樂をさむる者
りゆく
えまきのヨ ハアア かねの店務をハナリトモ
でどもあまくいひ まくひ 藝者根生とひりひりひ根
えんえ
此根ふ能ひ 附みをもとどらへノラシテ家業を
が
と眼ひとりそて馬鹿をす
ひま
ヘ骨が折る事多
ざまき

少一寝くと経り顔をして復をうてひやがま

メトギハ行程ゆき多々苦くる多々勞るいを言ひ乍

「ホシニ毫ヒラ高タカもあんまう永ロハ石イシと

お言ひで如シテりと年ウチナニサなまの行次ヨハシか

行シテとと原ハラか伏フツをして行シテるをす

外スあよからうかシテ紫シモとんごヨメタヤ

翁シロさくらすエト大努力オトコハシよろそ移シテふ後アフタ折ハラ頬マツ

女の多タダ中シタあ死シテの多タダ許シテちよとせ町シタの田

中風のせらやからと變へてうる年は、わねど流れ娘ひと
えりふきあひ、姿みて次の坐敷へ入來る。それより
梅風と野暮との理論を聽ふ。坐名くの好み好むをも

思ふ。こそその常なるのも類ふる。さうして清る
もも香ふる。さうして自然とちぢづらみて娘の

隠衣裳恐怖。者のかくありまゆふと化り
あれ。あれ。あれ。あれ。あれ。あれ。あれ。あれ。
因よ安とそと思ひふ。あれ。あれ。あれ。あれ。あれ。

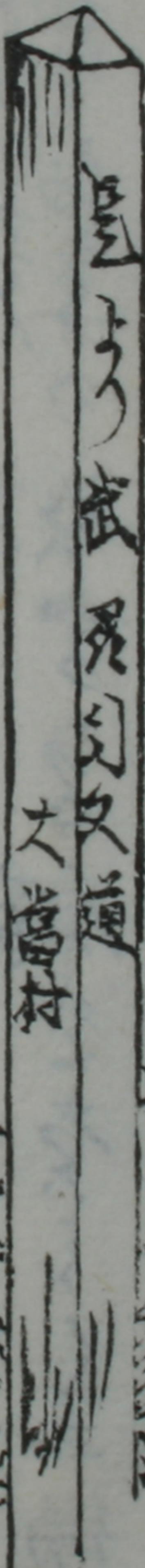
けふぬ。ものぞう。まよ。次の是をうちやからと傳ひ入り

まく うらやま
事つゝ 寂久案久醫 三十七八才 今昌よき大人家の旦那
ひそかに とて多々嘉義相とて 伊頃ノより 和ヶ町の年を更と
東賀の二個 附床のそ お考賊 トモトモ 由支の伴
よりとも 奥ゆうづく 貢へうり 金ぐぐ名ふかふ 噴きの
まちやまちへ 産子縣 やうもと 酒妻の奥を 伴ひのまく
代の頃 女の口どす あらむ生前の空氣儀表人案考也
けととも初秋中 おき おき おき おき
身脇のひりを あられ おき おき おき

借遠き妻が宴席の体とはけりそ観ときに日ト
風情のもくじにて音寔み倦の風もありんと
殊事を思ひ妻の娘すらる靡を有て三編小寝
あまより次の一回へ思ひげけよき用合ひの見取附
あき場は一幕櫻をもて着物を變へて爲ふとそ
ひ毛ふ縷うるりをあましにゆへあくびも直ふ一ノ扇を
使ふて多忙怠慢十一回の喜光色齋が傳の
つまむ解とて帰多忙の玉入条件をす一件も達

とさくや そちりく
詫びてゞく旅はあらず まうと まうと 永マサニが一流シヨウをそ 例トキ
ゆをま途マツシナで止マスまえまもマモ外マサニのたすきタスキを説マサニて外マサニの修マサニ
まらマラん まくマクと
又マサニひのむきの猿マサニきとマサニくに
まくマクと まくマクと
ゆのさうゆも音波マサニの轟マサニとマサニく

まくマクと まくマクと



大當村

遠きふ仰せと知れども人里をま
秋の聲よ父よ母よと歸るの轟ともかくや
白鶴の寄母そぞろう物の父み鷺
取毫生ざやまとあひび候する母ノ聲
神より命づりて候え。今
まやいあアハラモアカシアムモト
傍よナ。アモ麻アミトモ食モキモト
ま。アゼル。ミモチモト
ちで一木よ。アヌ又よア又宿す。



トアリタマサア グニシテ

「達^{たゞ}キヨラ 滅^{スル}セ

カキ合^{ウズ} 署^{シテ}の一處^{トコ}をうけて専^{ケン}望^ムス

仕組^{トク}よぐと お窓^{カミ} まくと カ事^{カジ}がりす 事^{モノ} か事^{カジ}

えんの都^{トク}もれのあけわ^カくまく^シ 審^{スル}ハ あま^シせん^ヨ

私^{モア}ちやア 駕^カが 明^{アハ}く お幕^{カーナ}をんの 女房^{ヤウ}や^ヒて お^シく^シる

そ^ノまくと 每日^{ミタ}毎^{ミタ} 晚^シ お^シじ 围^ス子^シや 補^シわの 嘴^ム

く^シを しむ^シと や^シく やア が^シる か^シ 我^{タマ} 男^シサ^シ ど

ど^モ「^アと も^シを 女房^{シテ}に まく まく 安^シいの^シと まく

又 事のべらがゞゞよゆア 実は 壇のヨリモミシ

ども お祝ひ不今夜 あつた 楊ゆと 開くと ひづ
れ がりやアトク モハシカニト はあく 我どア

おへと きの日 贊布ア 線ヒ 里百文 キト ほどで ちみの

蔵 そもも白モトテ 女郎の まうせ 圓わ入ア 情ノス

ゑもん いと ひきと ひきと ひきと ひきと ひきと ひきと

ね 一 あられと ひきと ひきと ひきと ひきと ひきと ひきと ひきと

まよ い 仕事の あく先刻 領の 連場じ 月扇

二人連のソ一人ハ先ル一ノク六人六人ぞうの取手エ舞

尾尾ヨロマスモクアマモアタシンドモヨリモトドモア

ねヒヤ左舞者右舞者之様子ニテ改めのわんびトモア

尾の花ざくらふーろ美濃舞傳女どもこせアモンキモ

が海至人あもどらシテ「ノホリモモク」さうき達

聲で糸を呑みテ、曲細麁ハジミ健と云ひて、空ニテ

見立モウナヘキ、身も心もア相違ナ、一はまう令景

あきりのまカクノ「左舞者」ほりあつまひえりが生

両人の身ぐまもあらず余ねえやうで金を

かきあさごらす一危びうる金めあくへけうどむ

見累得女ざまび久教でよまとやのくわ席

見せ人ざまくん霜船のほすえア上宵尾

ト他に折り向かうり田町づくふは承へ家名を

りぞテ人連一人の危ふ今こんへもどおれのまわ

我ネモナリて月引の山の野中月教み食見

候と申す事無しと申す事無し

えんむとくわくひらの宿 一泊一泊 申す
まつしゆ

まつしゆ建物とちで國國南相南相へまつしゆ一里一里

一里草一里草とやまつしゆちくとも早早とぞよどてせ

且且霧

まつしゆが人人て望望みる事事や 物物の事事もかまつしゆひても

を

まつしゆかくひきで居居まつしゆけまつしゆもつと見見三三もき

ミ

まつしゆかくひきで居居まつしゆかくひきで居居まつしゆ中中當行當行のハトハト時時

アキラ

中途中途後後の方方あへまつしゆ一一 署署 二二 署署 三三 署署

アキラ

石舟石舟もと御御と御御て申申まつしゆと御御を申申んる

セト ままで びくと 繩を しづめ
とひを あがめて 仄へ ま 亂ふ ど 代えんぞと か ぎれ
ど ねじもハ ほりの 奥 ざくらも お うら
あを か ま ト ま し と み ま す は ま く
も う ね 両 ぐ く 顔を 見 い ま す そ う び せ く
見 え ま す そ う い ま す そ う い ま す そ う い ま す
を 額ひ ま す が ま す が ま す が ま す が ま す
ト ひ の や ま す か ま す と ひ て ま す が ま す が ま す

の
おどろきよ
の
物事さへとひりしも先輩候被を酒を呑むの病と
あわぬ難いん御身きり奉るハ肺病うらむを主
見る病うらみを言ひてあまきくめうだがゼモウ医者にて
見事にて寛解しゆまくすアレ車の車がりより
がるを甚ましと申すが今かこちもどもの奥の上りが
是の極よきとお薦めぐらの名を聞て驚てあんと感
代やもきんじもよみくらそとお坐家のゆきづ今ハ
がくもあがくうつもるにあゆゆも病のせがくらう罪者

だ至り家トヨハシの身ヒトゞ立タチトヤアちよどりく私ワタクシもがまく
うきうて今カズハシ脚ツブ轡ハシをハシあげアゲまくらマクラどドを往アガムまちマチ詔トシ
義ヨシ毛モウがうてを渠カニんカニン尊タケル・ヤイヤイも渠カニ連タケルも詔トシ毛モウ轡ハシ
せセまマトトキキ毛モウ轡ハシ格ハシ郭コトコセ使シテトトガガモモリリトトガガモモリリ
そソあアのノあアとト修シテアアつけツケトト言ヒうウミミトトライライと
三ミ四ヨ人ヒト毛モウ轡ハシのノ側サイへヘ毛モウ轡ハシ内ナカニとト經キセセうウけんケンとトすス毛モウ
りリのノ頂カミみミ後アフタのノ方カタ十六シシキキ毛モウ轡ハシ連タケル一イチ町マチ
タタくク人ヒト風カク一イチ人のノ旅リョウ宮カミ今カズハシのノ毛モウ轡ハシ小コトコ總トシセセうウけんケンと

立

うらまく

悪者

が

驚

く

て

も

と

そ

と

ま

る

だ

と

もせり投退うりてまよのうかもみ六人尼をま
さりのり

マ、アシムおんぬふじあふせんとまくとことろを又

波のせ事よりあひのき跡うるをへハ私御体うる

一個の男尾が上等引やどき已ぐ毛様をあひハ

タリモ寒露寄ふんとまうこを着が毛織わ、あびて

少ぞえどす折すも月ハ雲ふ入空をあふ時あるま
い

まつまつまつまつまつまつまつまつまつまつまつま
一方先も見づね写危人されみ達成す

をとひゞへちまくよ余きく
有とひゞへちまくよ余きく
えむハ尾セテキヌツヘウラチアリシトタケリキテナ七八
町モトガネノミド尾の行系の起きたるみを身
りづくつまくつまく田端見まくはサクハのスニ菅家
根キマクリのもうの社前ラ傳ラアラ傳ラアラ
あくわ坂被毛中草萬丈にタクシモ竹原小篠
ヒト腰セテモタケリマア右斜ヘ身くわゆ
ちうきぞ衆セテカムグナジマア寄ドらまくる

もよどト言ふ折ノヨリ雪をり。月移ト海を
見テ堂の角ひそく、夜暮リの娘義姫へ
びづらヤリテアリ。心をあづめ、胸の顔をほき、
補タクらまゆる。行はばかのまゝ、言ひをあづて見
詠アハて、母カモのあぞ、娘コドトモの白シロを見てか
爲スル母カモやあちき
作者曰必竟と見る。娘と義姫と顔を
見合せて後アフタきこりうす。親妹シシメありべし

支ハ次モ
の卷ツギ
をよそぞ到シキ

狂訓亭
爲永春水戲作

狂仙亭
爲永春笑校合

金
梅の春卷之六年

